

経済・遠山ゼミ主催シンポジウム

「メイドイン川崎」
大学生が見た地元企業の魅力などを市民に紹介



2月4日、高津区の大
山街道ふるさと館イベン
が集積する高津区の久
地、宇奈根、下
野毛地区の中小
企業24社を訪問
してヒアリング
調査を実施。企
業の「強み」を、
経営者・開発・
環境・技術・地
域連携の5つの
カテゴリーに分
けて分析し、そ
の魅力や技術を

トホールで経済学部遠山
ゼミ(遠山浩准教授)主
催(後援・川崎市)のシ
ンポジウム「メイドイン
川崎」数十人から世界
へ」が開催された。同ゼ
ミ生が高津区の中小企業
24社の魅力や技術力を市
民に紹介した。

遠山ゼミ17人(一部
生田キャンパス3年次生
8人、一部神田キャン
パス3・4年次生9人)
は、活動の一貫として、
川崎のモノづくりの基盤
を支えてきた中小製造業
を集積する高津区の久
地、宇奈根、下
野毛地区の中小
企業24社を訪問
してヒアリング
調査を実施。企
業の「強み」を、
経営者・開発・
環境・技術・地
域連携の5つの
カテゴリーに分
けて分析し、そ
の魅力や技術を

▲ 成果を発表する学生

生田チームのリーダー
・銀山侑介さん(3年
次)は「企業訪問を通じ
て地元の中小企業が世界
と対等に戦える高度な技
術力をもつことを知り、
誇りに感じました」。神
田チームのリーダー・和
田達明さん(4年次)は
「この発表を通じて、住
民の方が少しでも川崎
の中小製造業の取り組み
を理解していただければ
うれしいです」と語った。

発表した。

続くディスカッション

では、住宅と工場が隣接
する環境で操業すること
の問題点や展望につい
て、当日紹介された24社
の経営者の方々の意見を
聞いた。原田津一川崎市
経済労働局産業振興部長
が「学生ならではの視点
と今の世相が反映された
発表はたいへん意義深い
ものだった」と総括。遠
山准教授は「本学の地元
であるこの地域を元気に
していきたい」と締めく
くった。

首都直下地震を想定

学生が帰宅困難者対応訓練

神田キャンパスで国内初の「シェイクアウト訓練」

東日本大震災から1年
を控えた3月9日、東京
千代田区が国内で初め
て「シェイクアウト訓
練」(米国発祥の一斉防
災訓練)を行った。千代
田区と「大規模災害時に
おける協力体制に関する
基本協定」を結ぶ専修大
学でも神田キャンパスで
学生・教職員150人が
参加、帰宅困難者対応訓
練などに取り組んだ。



揺れを感じたら机の下に身を隠す訓練をする学生たち

午後1時、東京湾北部
を震源とする首都直下
地震が発生し、同区で震
度5強の揺れとの想定に神
田キャンパスでは、「強
い揺れに備えてくださ
い」の校内放送が流れ
た。学生・教職員が一斉
に机やテーブルの下に潜
り込んだあと、1号館学
生ホールに避難した。



▲ 帰宅困難者の受け入れ訓練

その後、専修
大学が帰宅困難
者の受け入れを
受諾(100人
想定)、午後2
時、受け入れ訓
練が開始され、
学生有志団体S
KV(専修大学
神田ボランティア
会)高橋晴弥代
表・法2)はじ
め学生ら39人
が、「運営役」
と「帰宅困難者
」に分かれて訓練。避
難者名簿作りや水、高速
吸水凝固シート内蔵の
「簡単トイレ」など非常
時持ち出し物資が配られ
た。さらに発電機、テ
ンなど防災資器の取り扱
い訓練も行った。

高大連携

昨年12月から今年2月
にかけて高大連携による
協定校との連携プログラ
ムが生田キャンパスで行
われた。

12月16日、生田キャン
パスで神奈川県立川崎高
校1年生を対象とした
「1日体験入学」が行わ
れた。約240人の生徒
たちは模擬授業を受講し
たあと、各施設を見学し
た。

生修了式が、1月21日、
生田キャンパスで行われ
た。砂原由和・同協議会
座長(ネットワーク情報
学部教授)のあいさつに
続き、聴講生25人に修了
証書が交付された。写真
上。

高大連携協議会
2011高大連携協
議が、2月4日、生田キ
ャンパスで開かれ、「高
大連携のこれまでとこれ
から」をテーマに意見交
換が行われた。写真右。
付属4校合格者の
学部入門講座を開催
2月17日、生田キャン

2月17日、専修大学玉
名高校の2年次生39人が
生田キャンパスに来学
し、「E・Y・O・O」の
会による施設見学と座
談会が開かれた。

雑誌作りのすべてを実践する
文学部・川上隆志ゼミ

『SHOW』第6号完成

川上隆志ゼミ(文学部
日本文学文化学科)は、
雑誌『SHOW』第6号
を刊行した。元岩波書店
編集者である川上教授の
指導で雑誌作りの基本を
学び、企画・構成、取材、
原稿書き、撮影、DTP
による紙面製作、校正な
ど、刊行までの一連の作
業を行った。

「共生」では、ハンセ
ン病療養所「多磨全生
園」訪問記、震災によっ
て取り壊しになった生田
校舎の思い出を学生たち
に聞いた「さらば僕らの

AN」を4本の柱に、大
学生の視点を生かし、多
彩なインタビューを掲
載。全136ページは盛
りだくさんの内容だ。
「NO BORDER
R」では男と女の性差、
国籍の違いなど、固定観
念にとらわれず、それぞ
れの生き方を認め合う世
界を紹介している。

「共生」では、ハンセ
ン病療養所「多磨全生
園」訪問記、震災によっ
て取り壊しになった生田
校舎の思い出を学生たち
に聞いた「さらば僕らの

学術やスポーツなどの
分野で優れた成績を収め
た学生を奨励する「自己
啓発奨学生」に、201
1年開催の「ACM国際
大学プログラミングコン
テスト」アジア地区予選
台湾大会で72チーム中17
位の成績を収めたネット
ワーク情報学部4年次の
小林良太さん、本田智史
さん、井上和博さんチ
ームが団体で選ばれ、2月

自己啓発奨学生に
ネットワーク情報学部3人

2月17日、専修大学玉
名高校の2年次生39人が
生田キャンパスに来学
し、「E・Y・O・O」の
会による施設見学と座
談会が開かれた。

専大玉名高校
2年次生が来学



▲ 『SHOW』第6号を
手に川上ゼミ生たち

「共生」日本文化」C
に聞いた「さらば僕らの
災」の年である2011
年度のテーマは「再考」。
「NO BORDER」
「共生」日本文化」C
に聞いた「さらば僕らの
災」の年である2011
年度のテーマは「再考」。
「NO BORDER」



▲ 左から井上さん、小林
さん、阿藤学生部長

自己啓発奨学生に
ネットワーク情報学部3人

2月17日、専修大学玉
名高校の2年次生39人が
生田キャンパスに来学
し、「E・Y・O・O」の
会による施設見学と座
談会が開かれた。

専大玉名高校
2年次生が来学

2月17日、専修大学玉
名高校の2年次生39人が
生田キャンパスに来学
し、「E・Y・O・O」の
会による施設見学と座
談会が開かれた。

専大玉名高校
2年次生が来学

漫画研究同好会
トミー
ござって
十回言ってみて
おざざざざざざざざ
おざざざざざざざざ
ハイじゃあ
ござざざざ
エルボー

育友128号刊行
指定試験奨学生
公認会計士試験
合格者6人に奨学金
公認会計士などの難関
試験に合格した学生を対
象とした「指定試験奨学
生」に2月22日、阿藤学
生部長から奨学金が支給
された(2011年度対
象者6人の氏名は本紙1
月号に既報)。

外国語のススメ
LL研究室
-6-
中国語 断想
前川 亨 法学部准教授
テレビの番組で、某大学で中国現代
政治を教えている某教授がこんなこと
を言っていた。「自然と人間とが一体
になって生きるという哲学は中国にな
い日本独自のものだ。日本はこれを今
後生かしていくべきだ」うんぬん。私
はあぜんとした。中国の伝統思想の主
流が天人相関、天人合一(ここでいう
「天」とは自然界のこと)であって、
自然界と人間界とを分ける発想の方が
異例に属する。これは常識といってよ
い。この世界観は、モノを数える時に
生物と無生物、人間とそれ以外とを区
別しない現代中国語の量詞の用法にも
生きている。むしろ日本語の方が、人
間とそれ以外とに明確に線を引いて区
別する言語なのだ。
某教授はなぜそのような発言をした
のだろうか。
現代中国の変化は余りにも大きく、
日々流動する情報をフォローするのも
並大抵ではない。しかし、他地域の専門
家などと並んで中国のことを語ろうと
する場合には、どうしても中国の伝統
的な価値観や世界観に踏み込むこと
になる。それで、俗耳に入り易いドグ
マにもたれかかってしまうのだ。また、
中国語とは単なる技術であって、そこ
から中国人の思考様式や生活感覚を
読み取ろうというふうには思わないの
だろう。
現在、学生の関心が余りに「今」に
限定されていることに危うさを感じ
る。それでは底の浅いものにしかなら
ない。私は現代中国に関心をもつ若者
たちにこそ、「今」に限定されない中
国全体に対する視野を持ってもらいた
いと切望している。
※全文はLL研究室ホームページで